

# 英語教育と『文化』をめぐって

坂 内 正\*

## On the Teaching of English and "Culture"

Tadashi BANNAI

### 要 旨

英語教育と『文化』を学ぶことは切り離して考えられないが、それがわが国の英語教育における「規範」としての学校文法の役割と同様の扱い方を受けるならば、学習者（及び教授者）の自己を確立する営為を歪める結果をもたらすだけであろう。

「国際化時代」に生きる私たちは、意志疎通のための「力」を身につけるためだけでなく、〈人間〉を考え、自己確立・自我の実現という究極の目標に正しく向かっていくためにこそ、英語を学び『文化』を学ぶのである。

### §1. は じ め に

18世紀に成立をみた規範文法は、その文法観をほとんどそのまま今日の学校文法に引きついできた。<sup>1)</sup> わが国の英語教育においても、例えば一世を風靡した観のあった pattern practice にしても、構造主義言語学に支えられたものであったはずにもかかわらず、その内実は文法事項と構文とをからめたものの機械的反復練習であった。また現在よく口にされる「言語活動の重視」<sup>2)</sup> という点からの英語教育の見直しも、中学校における『週3体制』と改革のすすまぬ大学入試との間にあって、学校文法の有効性<sup>3)</sup> をつきくずすものにはなり得ていない。

しかしながら、視点を変えて言えば、外国語学習のもつ「母語とは異なる言語習慣を一定レベルまで獲得する」という面においてどうしても、文法を「規範」として学ぶ必要があると言えなくもないのである。文法を rules（「支配」の意味もある）をとらえるか regulations（「調整」の意味もある）をとらえるかの問題はあっても、言語が社会的存在である以上、約束ごととしての文法は一応身につけざるを得ないからである。その意味において、わが国の英語教育における文法教育の役

割は今後も大きなものであり続けることであろう。

むしろ問題なのは、「約束ごと」を身につける学習方法が、近年ようやくその重要性が認識されるようになった『文化』の問題にまで、適用されつつあることである。欧米の『文化』を絶対視するようなことがあってはならない。欧米の文化的尺度を「規範」の如く教え、学んではならないのである。

本稿は、わが国の英語教育と『文化』の問題について分析し、関わりを明らかにしつつそのあるべき姿を考察しようとするものである。

### §2. 『文化』を扱う教材

現実には、英語学習は他言語を話す人々との意志の疎通のために必要な「力」<sup>4)</sup> を身につけるという意味だけをもつのではない。<sup>5)</sup> 言語習慣の違いはしばしば「切りとり方」の違いの表れを示しているし、風俗・習慣・思考様式といった広義の『文化』を、様々な国々について理解したわが国のそれを再認識するなかで、〈人間〉について考えるという重要な意味を英語学習はもっているのである。「歴史」や「地理」といった教科目の役割はもちろん否定するものではないが、それらとの相補的關係を保ちつつも、何よりも言語そのものが社

\* 講師 一般教科英語

会的存在であり『文化』の大きな部分を支えつつ同時にその重要な一部でもあるという意味において、英語教育と『文化』を学ぶことは切り離して考えられないのである。

よく言われる「使える英語」というものにして、実面的な面でそれを支えているのは、異なる文化への理解に他ならないのではないだろうか。文法事項等やある程度通じる発音習慣を身につけたはずの人が意志の疎通に失敗し、あるいは「二枚舌を使う人物」<sup>6)</sup>として、またあるいは「無愛想で不快な人物」<sup>7)</sup>として、その人格そのものを誤解されてしまう例を私たちは知っている。また逆に私たちが、異なる文化を背景にもつ人々の発言や行動を自分たちだけに通じる尺度で判断してしまい、不当な非難を浴びせたり見当はずれの賞讃をおくったりしている場合も、実は案外あるようなのである。しかも問題なのは、その種の誤解が生じたという事実さえ気づかずにすぎってしまう場合があることなのである。

身近にある教材から、いくつかの例を拾いだし、試みることにしよう。

When invited to dinners or tea parties, Americans usually do not bring gifts for their host or hostess; however, they may take a bottle of wine or flowers. It is not customary for Americans to bring a box of cookies or cakes as Japanese do.<sup>8)</sup>

この、内容的にはどうということのない習慣の違いを述べた文にさえ、気づかずにすぎてしまいそんな‘host or hostess’という表現形式や‘flowers’の意外性が存在している。前者はもちろん米国における Women’s Liberation Movement の成果(?)を示す表現形式であるし、<sup>9)</sup> 後者は、家庭の食卓に花を飾る習慣のほとんどないわが国の文化からは想像もつかない「手みやげ」である。しかし、根本的な問題は、あげる「もの」の違いについての知識にとどまってしまっている点である。むしろ、こうしたことのあった数日後あるいは数ヶ月後でさえ出会った際にお礼を言う習慣をもつ日本人と、その場で必ず包みを解いて大喜びしてみせながら数日たてばそのことにもうふれないのが普通の感覚であるという米国人との、対照的な違いの方が興味深いことではないだろうか。つまり、日本人の場合には、親切を受けたことそしてそれを感謝していることを口にするることによ

り、いわば過去の良いなお互いの関係を次の出会いの出発点におくことによって、その後の関係を良好なものにし続けていく意志を無意識のうちに表明していると言えるわけであり、一方米国人の場合にはそういう形での友好の意志表明はせず、今、現在の良好な関係を作り出すことに気持を集中する傾向がある、と言えるのである。そこまで踏みこんだ『文化』比較こそ、望ましいのではないだろうか。

異なる文化への理解は、一方的であってはならない。相互理解こそ対等の関係を支える基盤となるはずのものである。

An American who lived in Japan for three years recalled his experiences in Japan, and said his most difficult problem was knowing how to interpret Japanese avoidance of eye contact. Whenever his Japanese friend avoided eye contact, he felt he had done something wrong or said something that should not have been said. He remarked, “It took me a while to understand Japanese eye behavior is different from American.”<sup>10)</sup>

この一米国人の当惑と理解できた時の安堵感は、実に共感を覚える。彼が味わったであろう疎外感と不安感は同情に値すると思われるし、彼が今やひとつの壁をのり越えて日本人をより理解し得たことに、心からの喜びを感じるのである。ところが著者は、上の文章に続けて

When you talk to an American, try to look at his or her eyes, but do not stare……<sup>11)</sup>

などと、目と目の合わせ方まで教えようとするのである。私たちが『文化』を学ぶのは、米国人のようにふるまうためののだろうか？

同じテキストの「沈黙」を扱った文章の中で、日本人と米国人とではそのとらえ方がかなり違っていることを指摘した後に、

……Since it often takes Japanese extra time to formulate a sentence in English, this difference is multiplied by the difficulty of speaking the second language……<sup>12)</sup> (下線は引用者)

と述べるに至っては、著者の日本に対する理解の

程度が知れようというものである。もっとも数ページ後には

……If communication is carried out by means of a foreign language such as English, it takes more time for Japanese to surmise……<sup>13)</sup> (下線は引用者)

という部分があるので、もしかすると、第2言語としての英語と外国語としての英語の区別さえつかないだけのこともかもしれないが。いずれにせよ『文化』を扱ったテキスト自体に問題があることもあるようである。

別のテキストから、さらに例をとりあげることしよう。

In Japan, when someone is about to take a test, or enter a sports event, or start a new job, it is customary for others to say to him, "Gambatte!", which translates roughly as "Work hard!" This would sound very strange in English. The usual English expression would be just the opposite: "Don't work too hard," or "Take it easy." Americans would assume that anyone in such a situation would already be keyed up and wouldn't need to be told to work hard. Instead, he would need to be reminded to relax.<sup>14)</sup>

この文章には二重の誤解があると思われる。第一に、私たちは「頑張って!」と言うばかりでなく、「あまり固くならないでね!」とか「気楽にやっといで」といった言い方をすることも結構あるという事実である。その点では日本語も英語もそう違いはない。第二に、つまるところこれらは挨拶言葉にすぎないのであって、成功を願っている者がここにもいるぞ、と声をかけているだけのことであり、言われた当人がその言葉を文字通りに受けとめるなどとは考えられない点である。文章の後半はこじつけにすぎない。

このテキストには、日本語と英語それぞれの会話のすすめ方をボウリングとテニスあるいはバレーボールになぞらえた、なかなか興味深い一章がある。<sup>15)</sup> 日本語の場合をボウリングになぞらえるのは、言いつばなしで対話が成立していないことをも意味するので少々不適当に感ずるが、そう悪いたえではない。日本人による英語のクラス

(著者が教えている)での会話あるいは討論の様子をバレーボールのサーブ練習のようなものにとえて描写したくんだり<sup>16)</sup>は実に見事である。いささか長すぎるので引用できないのが残念である。しかしながらまたしても問題なのは、著者自身が自分のクラスで学生たちにやらせようとしているという、米国人のようにポンポンと言葉のとびかう会話のし方を教えるということの意味である。

……Knowing the rules is not at all the same thing as playing the game.<sup>17)</sup>

とかで、英語で会話する間合いを身につけることの大切さを、今や過去のものになりつつある日本人の食卓での沈黙にからめてまで、著者は教えてくれている。

こうして見てくると、たしかにどこかがおかしい。『文化』を学ぶこと、とは何なのだろう?

### §3. 『文化』を学ぶことの意味

わが国の英語教育を考える際、学習者たちのおかれている状態にも目を向けるべきことは、当然であろう。彼らは立派な日本語話者であり、英語が国際語の役割をほぼ果していることは知識として知っているものの自分自身の生活に英語を取り入れる必要性は全く感じていない、と言ってよからう。何故ならわが国は『翻訳文学』の咲きほこる稀有な国であり、学問のための文献さえも翻訳がどんどん手に入る恵まれた条件にある<sup>18)</sup>からである。しかし一方では大量の英(米)語の外來語としての流入があり、人的・物的交流ばかりか情報の国際化によって、「国際化時代」の波をひしひしと感じているのである。

そうした状態におかれている彼らはまた、例えば pub を米国のもの(習慣)だと思っていたり、インド人やアフリカの多くの国々の人々の大多数が英語を母語としていたりと思っていたりする存在でもある。私たちがこれほど欧米の情報に接しているからには日本のこともまたよく知られているに違いない、という思いこみにも注意しておく必要があるだろう。その意味においても英語教育は、単なる技能習得科目などでは決してなく『文化』を学ぶひとつの「場」なのである。

前章でとりあげたテキストもその具体例であるが、近年この分野の研究は目ざましい発展をとげつつあって、<sup>19)</sup> 英語教育の面においても、大学の

一般英語（教養英語）のためのテキストとして出版される「異文化理解」「比較文化」「異文化間コミュニケーション」ものは年々増えてきている。また中学・高校の教科書においても、この種の題材を扱ったものの比重が高まりつつある。明らかに、英語教育の中の『文化』の役割は今や広く共通認識となってきたのである。

しかしながら、そういった現象を手ばなしに喜べないのは、前章で見たような、気がかりな点がいくつか目につくからである。整理してみると、おおよそ次の3点に絞られるであろう。

- 1) あまりに皮相的な、「違い」ばかりを興味本位に並べただけのものがあること
- 2) 他言語・異文化の世界に住む人々からの、「違い」を「間違い」とみてしまった上での日本人・日本文化批判が見受けられること
- 3) 外国人が著者である場合、そのほとんどが欧米人であること

1) についてはその問題点は明らかである。「違い」について語る時、何故それが生じてきたのか、それはどのような文化的枠組の「違い」に支えられて存在し続けているのか、またその「違い」にもかかわらず共通する心情があるのかないか、こういった事柄に触れずにすまずことは根本的に誤りである。単なる「知識」の切り貼りは本当の意味の異文化理解にほど遠く、いたずらに（自らの文化を基準として見た）珍奇さを愉しむばかりであろう。<sup>20)</sup>

2) は1) のちょうど裏返しという面をもっているが、「なるほど、私たちの発言や行動がこんな風に誤解されることもあるのか。」というわけで、そのことから逆に彼らのものの考え方や行動のし方が理解できる場合もあり得るものの、基準の押しつけは、一方で激しい劣等意識をひきおこしつつ他方で反発心を刺激して極端な民族主義とでもいべき方向に私たちを追いやるのである。<sup>21)</sup> 文化比較に「良い・悪い」「進んでいる・遅れている」といったとらえ方を持ち込むことは、他民族への軽蔑や悪感情、場合によっては強い差別（被差別）意識をもたらすのである。これは実に危険であり有害なことである。また一部には、この種の批判をむやみに有難がって鵜呑みにし、「日本語は論理性に欠けている<sup>22)</sup>」だの「もっとはっきり自分の意見を主張すべきだ<sup>23)</sup>」だのと騒ぎだてる者がいるようであるが、冷静に余裕をもって対応していくべきであろう。

- 3) に関しては、実に明治以来の、欧米社会を

ひとつの理想ないしは模範と仰ぎみる姿勢が、未だに続いていることの表われと言えよう。英語で書かれたもの必ずしも英米人によるものではないはずである。それが証拠には、少数ながらインド人ジャーナリストによって書かれたもの<sup>24)</sup>等も存在している。異文化を背景とする人々によるわが国の文化に対する観察や分析に接したり、また彼我の相違点・共通点の紹介を受けることは、たしかに有益なことであろうけれど、その視点や紹介者の立場、またその内容に著しい文化的・地域的・民族的・思想的な偏りがある場合、それは決して真の国際理解に通じる道とは言えない。それはむしろ結果として私たちが欧米化されていく道であり、奇妙な優越感とぬき難い劣等感とがないまぜになった、歪んだ自己像を作り上げていく過程に他ならないのである。

こうして改めて分析してみると、事の本質は「教育」というものの根幹に関わるものであることが、明らかになったように思われる。すなわち、§1で述べたようにわが国の英語教育には『規範文法』以来の文法観がその基礎として存在しており、一方『文化』の問題がしばしば異文化理解だけに限定されてしまったりまた欧米人の「文化」を尺度としてもものを見ることに慣らされあるいはいたずらにそれに反発する結果を生み出しかねないことを、この章では明らかにしてきたのであるから、結局わが国の英語教育は今や「教育」という名の落とし穴に転落する寸前の状態にある、ということなのである。

落とし穴とはつまり、自己の確立に失敗し、欧米の価値観あるいは「民族主義的」な類型化された価値観のいずれにせよ、既成のものを安易にわがものと思い込まれることを指すのである。私たちは、「米国ではこうだ」「西欧ではこうだ」といった類の価値観の一方的流入をなくし、客観的な比較と『文化』の本質に迫る考察をもって、英語教育における『文化』の問題に対処していかなければならない。それは同時に、「日本人的価値観」なるものの瞞し<sup>25)</sup>に気づき気づかせる過程でもあり、究極的に自己確立・自我の実現へと結びついていくはずのものでなくてはならない。自己の自己たる所以を確立することは、他者を同等の一個の人間として文化の担い手として認めることと、同時進行する作業なのであるから。

## § 4. む す び

英国紳士を気取る者がいる。米国流プラグマティズムの信奉者がいる。英語を本当にものにするためには『もしまだ間に合うならぜひ英米人を妻に』と勧める、およそ通常の神経の持ち主とは思えない『学者』がいる。<sup>26)</sup> ごく普通の、平均的な能力をもつ学習者が、何をどのように学ぶのかその議論さえ済んではないというのに、「国際化時代」はもう始まっている。

あの大韓航空機事件の時、「謝罪は全面的責任を認めること」という認識<sup>27)</sup>でわが国に対応し続けたソ連当局と、「なにとはともあれ詫びの一言もないとは非常識（・誠意がない・情の通じない・冷たい・官僚主義 etc.）」と受けとめ続けたわが国の当局者及びほとんどのマス・コミとのすれ違いほど、私たちが国際化時代に生きていることの意味を感じさせられるものはなかったのではないだろうか。『謝罪』ひとつをとっても文化的な「違い」は歴然としているのであって、そのことに気づかないあるいは気づかないふりをし続けることによって、反ソ・反共の一大キャンペーンを側面から支えた者たちがいることを、私たちは忘れてはならない。話はやや古いが、テルアビブでのパレスチナゲリラによる乱射事件<sup>28)</sup>の際、『犯人』が日本人であったことをもってわが国が謝罪のための特命大使を派遣した<sup>29)</sup>ことがどれほど「奇異なこと」として眺められ、一部には「あの事件の背後には日本政府が!？」といった疑問さえ抱かせるという余波があったことも、私たちは知っておく必要があるだろう。<sup>30)</sup>

『文化』の問題を考える上で大きな意味をもつと思われる最近のあるできごとを以下に紹介し、本稿をひとまず閉じることにしよう。

それは、つい先頃のロサンゼルス・オリンピックにおいて起きたことである。客観的な数値（所要時間や距離といった）によって競われる種目ではなく、しかも観客の反応や競技者自身の自己評価ぶりが審判に微妙に影響し得る条件下に行なわれたことが、私の観察した現象を生み出したものと思われる。種目は「体操」であった。テレビ画面に映し出されたそれは、ほとんど「ショー」であった。それはそれで良いのかもしれない、『より美しく』が標語の一部なのであるから。しかし問題は、試技終了直後の競技者の態度であった。誰も「全力を尽した」という誇りは共通のはずであり、また「成功した」と思えた時、自然に喜びが胸にわ

き出てくるものでもあろう。その誇りや喜びをどう表現するかしないかは、しかしながら個々の『文化』の問題であるはずなのだ。けれどもその圧倒的多数を米国人が占める観客たちが、この「違い」を認めようとしなかったことは事実である。試技を終え、胸をはって成功を誇示しあるいは両手をあげて観客に成功をアピールする、その満面に湛えた笑みに対して、観客は熱狂的な喝采をおくったのであり、そうしない競技者への拍手の量が格段に少なかったことは私たちが見たとおりだからである。そして、極めて残念なことであるが、そのアピールが同時に高い得点へのアピールの意味をもっていたことも結果的に事実であったと言わざるを得ない。得点は試技の内容に対して与えられるものであって試技終了直後の観客へのアピールや競技者自身の自己評価ぶりに左右されるべきでない、などという『正論』はもはや通用しない世界がそこに現出した、と見たのは決して私ひとりではなかったはずである。<sup>31) 32)</sup>

けれども、本当の意味で問題となる現象が起きたのは、上述のできごとの後なのである。そこに私たちが見たのは、満面に笑みを湛え両手をあげて観客にアピールする日本人選手たちの姿であり、実に大げさに抱き合ったり肩をたたき合ったり「成功」をアピールする彼らであった。雰囲気酔ってそうしたのだ、自然にああなったのだ、そう思ったかったが、大写しのテレビ画面は、彼らのはしゃぎようがどこか作りものめいたざこちなものであることを、情容赦なく私たちに伝えたのであった。私はこの時の彼らの表情を、目を、決して忘れないであらう。<sup>33)</sup>

## 注

- 1) 規範文法はR. LowthやL. Murrayの手により生み出されて以来、大衆の拠るべき基準としての役割を果たし続けている。成立の事情やその文法観については、拙文『文法家の役割についての試論』（苫小牧高専紀要第18号1983所収, pp.167~174）を参照されたい。
- 2) 昭和52年の中学校学習指導要領改訂以来、特にこの表現が目につくようになった。
- 3) その有効性と問題点については、既にふれたことがある。（『英語教育に関する覚書』、苫小牧高専紀要第19号1984所収, pp.212~213）
- 4) 英語学習が何をするための「力」をつけさせ

- るのかについての考察については、重複を避ける。→ibid. pp.211~213
- 5) 英語をコミュニケーションのための手段とだけ考えようとするむきもあるが、筆者はそのような「言語=道具」論の立場には立たない。その理由はこの小論の内容から自ずと明らかであろう。
- 6) 相手の気持を傷つけまいとして反対意見や拒絶を直接的表現で言い表わさないようにする態度が、このような誤解のきっかけになるようである。
- 7) 挨拶や社交辞令についての考え方の違いがきっかけになりやすいようである。
- 8) 'AMERICAN COMMUNICATION PATTERNS' 1983 (金星堂) からの引用。p.1 l. 15~p.2 l. 2
- 9) 厳密に言えば、何故hostを先に言うかも問題にされるべきであろうし、こんなわずらわしい小手先だけの変化は、本当の男女同権ということとは無関係だと筆者には思えてならない。その意味の(?)である。
- 10) 前出の 'AMERICAN……' からの引用。p.19. ll.15~22
- 11) ibid. p.19. ll.23~24
- 12) ibid. p.23. ll.8~10
- 13) ibid. p.26. l.27~p.27. l. 2
- 14) 'POLITE FICTIONS' 1982 (金星堂) からの引用。p.23 l.19~p.24 l. 1
- 15) ibid. pp.80~86
- 16) ibid. p.84
- 17) ibid. p. 85 ll. 2 ~ 3
- 18) もちろん誤訳の問題や英語からの翻訳の比重(重訳を含めて)、また翻訳されるものとされにくい傾向のあるものの問題などが存在しているが、それにしても膨大な量の翻訳がなされておりずいぶん便利である。
- 19) 印象記風のものや科学的よそおいをもった『100人に聞きました』まがいのものから、緻密な調査分析に基づく研究に至るまで、一種のブームのような状況を呈している。
- 20) 愉しみとして得られたこの種の雑学的知識が案外何かの際に役立つこともあるだろうが、それは結果としてそうなのであって、本来的に、この種のテキストで学ぶことは疑似知的エリートを作りだすことに他ならない。
- 21) 事実、学生たちの中には「こんな文章を読まされるのはもうたくさんだ。日本人には日本人の考え方ややり方があるのだから、よその国の連中がどう思うかが関係ない。俺たちは正しい。」という極めて感情的な反発を示すものもあるのである。そうなってしまうと、国際理解どころの話ではない。
- 22) 単数・複数の別を一々示さないことや完了時制をもたないことが、言語として論理性を欠くことになるだろうか? 英語は果たして「論理的な言語なのだろうか? そもそも論理性を本当に欠いている言語など存在するのだろうか?
- 23) 謙譲, 互譲, ゆかしさ, やわらかさといった日本語表現のもつ特質をむげに捨て去ることは、本当に望ましいことであろうか?
- 24) 'The Japanese as Internationalists' by K. V. Narain in 'How We See Japan' 1974 Eichosha Co., Ltd.ただし、その内容は欧米人の書くものとそう違ってないのが気になる。
- 25) 日本人論も依然として盛んであるが、「日本人」として括りきれるものでないことが多く存在することを忘れてはいないだろうか。また「日本人ならこう考えるべきだ・こう行動すべきだ」という規制の恐さにも、私たちは敏感でなければならぬ。
- 26) 種としての日本人を優秀なものにしていくために国際結婚を、などという錯乱したことを言う人間も世の中にはいるくらいであるから、この程度で驚いてはいけなないのかもしれない。
- 27) この認識は世界的にみてもむしろ多数派に属するものであり、とりわけ米国ではこの認識はごくあたりまえとされている。(責任をとわれることのない性質のことがらの場合は、実に自然に詫びるのであるが。)その意味では、この事件の責任の真の所在が不明な段階で米国の政府関係者が「ソ連が謝罪しないこと」を非難してみせたのは、日本人むけの意図的なものであったと考えざるをえない。結果としてみれば事件の責任がその根本において大韓航空機側にあったことは明らかであるし、しかも米国の政府関係者たちが最初からそれを知っていたこともまた、明らかだからである。
- 28) 1972年5月30日イスラエルのテルアビブ・ロッド空港で発生した、パレスチナゲリラのメンバーである日本人3名による無差別大量殺人(テロ)事件。一般の人々25名が死亡、72名の負傷者がでた。
- 29) 事件後ただちに(6月2日)、日本政府は特命

- 大使をイスラエルに派遣し、メイア首相(当時)に佐藤首相(当時)の親書を手渡すとともに謝罪の意を表わした。見舞金を贈っている。
- 30) 当時私自身も、外国人の知人たちから「何故、パレスチナゲリラのやったことを日本の政府が謝罪するのか?」と尋ねられたし、その後いくつか同じ疑問を活字で見た記憶がある。もちろんいわゆる「政治的判断」というものなのではあろうが、この謝罪が大多数の日本人の心情に適うものであったことも事実であろう。
- 31) 事実、ある新聞には「これからは、フィニッシュをいかに上手にきめ、観客にいかにアピールするかということも課題としなければならない」といった趣旨の解説記事があった。
- 32) スポーツの種類によっては、競技中の態度を当然その評価(得点)対象に含むこともあり得ることである。しかしここでとりあげた例は、そういうこととは別の次元の問題である。
- 33) 一時的にせよ自分の本来の姿を捨てて演技することの気恥かしさは、誰よりも本人が最も強く感ずるのである。もっとも、自己の一貫性を守るためにその演技を演技と感じないようにになってしまうことの方が、一層おそろしいことであるけれども。

## 参 考 文 献

- ed. by Shūkan Asahi. *How We See Japan* 1974 (英潮社新社)
- 別宮貞徳『こだわり版ほんやくノートー 翻訳感覚・言葉の世界』1982 (PHP研究所)
- J.カーカップ, 中野道雄共著『日本人と英米人』1973 (大修館)
- 國弘正雄『異文化に橋を架ける』1976 (ELEC)
- 中村 敬『私説英語教育論』1980 (研究社)
- 中村 敬, 森住 衛共編『英語教育指導ライブラリー②英語教育と文化』1984 (三省堂)
- Nishida, H. and W. Gudykunst *AMERICAN COMMUNICATION PATTERNS* 1983 (金星堂)
- Sakamoto, N. and R. Naotsuka *POLITE FICTIONS* 1982 (金星堂)
- 鈴木孝夫『ことばと文化』岩波新書。1973 (岩波書店)
- 米山朝二, 佐野正之共著『新しい英語科教育法』1983 (大修館)

(昭和 59 年 11 月 30 日受理)

